



がん診療連携クリティカルパスについて

平成19年4月に「がん対策基本法」が施行され、同年6月に閣議決定された「がん対策推進基本計画」では、5大がんに関する地域連携クリティカルパスを5年以内に整備することが目標とされました。これを受け、全道のがん診療連携拠点病院では、共通のフォームによる運用に向けて、5大がんの地域連携パスの作成に取り組んでまいりました。

この間、旭川市医師会様のご協力をいただきながらアンケート調査や説明会を実施し、協力医療機関様との連絡調整を行ってまいりましたが、平成23年10月からパスの運用を開始する運びとなりました。ご協力に深く感謝を申し上げます。

パスを運用することによって、「がん治療連携指導料」が算定可能となり、算定をするためには、北海道厚生局へ施設基準の届出をする必要があります。5大がんのパス資料ならびにパスの届出に必要な書類と診療報酬に関する説明につきましては、準備が整い次第、当院ホームページに掲載いたしますのでご参照ください。なお、施設基準の届出においては、旭川市内の3つの拠点病院(旭川医科大学病院、旭川厚生病院、市立旭川病院)を連携先として届け出ていただくこととしておりますのでご了承ください。

新たに協力医療機関になっていただける医療機関がございましたら、お手数でも当院地域医療連携室にご連絡くださいますようお願い申し上げます。



胃癌術後フォロー連携パス

胃癌術後フォロー連携パス
() 用経過報告書

◆患者 姓 名 歳 ◆手術日 平成 年 月 日

◆主治医 ◆医健歴

◆注意：パスは、ガイドラインです。患者には個人差があり、治療・回診にも影響します。
目録：ダンピング症状と再発を疑わせる所見がないこと

	()	
	2ヶ月後	3ヶ月後
バイタル	体温	年 月 日
	血圧	年 月 日
	HR	年 月 日
	呼吸	年 月 日
	体重	年 月 日
検査	PS	0-1-2-3-4
	検査	□ 採血 □ 腫瘍マーカー
医歴	パランス	□ ダンピング症状の確認 □ 腹痛 □ 下痢 (日/日) □ 嘔吐 (日/日) □ 嘔血 (日/日) □ 動悸 □ めまい □ 冷汗 □ 顔面紅潮 □ 全身倦怠感 □ 貧血 □ 栄養障害 □ 再発を疑わせる所見
	パランス	□ ダンピング症状の確認 □ 腹痛 □ 下痢 (日/日) □ 嘔吐 (日/日) □ 嘔血 (日/日) □ 動悸 □ めまい □ 冷汗 □ 顔面紅潮 □ 全身倦怠感 □ 貧血 □ 栄養障害 □ 再発を疑わせる所見
特記事項		()
サイン		Dr. NS

※パランス集計簿
送付：理由
返却：理由

循環器病センター

循環器内科部門のご紹介

当院では、2005年10月に、消化器病センター、糖尿病センター、循環器病センターを同時に開設いたしました。循環器内科は全国にも先駆けCCU(冠動脈疾患集中治療室)を設置し、胸部外科(心臓血管外科)は道内屈指の手術件数を誇り道北地区の基幹病院として診断・治療にあたってきましたが、循環器病センター開設とともに、より一層両科の連携を強化し、さらに質の高い医療を提供することを目指しております。

循環器内科部門の診療概要

狭心症や心筋梗塞などの冠動脈疾患、高血圧、不整脈、心不全などを診療していますが、特に循環器救急に力を入れており、急性心筋梗塞は歴代、旭川で最も多くの症例数の治療に当たっています。

侵襲的治療として、経皮的冠動脈インターベンション(PCI)の症例数は年間200以上あり、特に石灰化病変に対するロータブレードによる切削術は道北地区で唯一施行可能であり、透析患者、重症糖尿病患者などで、血管が固くステントが入らない、狭窄が広がらない症例に対し効果を発揮するため、他院で治療不可能な患者さんの依頼をうけています。また、致死的不整脈に対して、突然死を防止するための植え込み型除細動器(ICD)や、重症心不全に対して、左室と右室を同時にペースングして同期させる両室ペースング(Cardiac Resynchronization Therapy; CRT)などの高度先進医療は旭川では医大と当院のみが認定施設となっており、適応例には積極的に植え込み治療を行っています。さらに、急性心原性肺水腫には、気管内挿管、人工呼吸器に頼らないで済むように、非侵襲的陽圧呼吸療法(NPPV ;BipapやCpap)も積極的に取り入れております。

また治療のみならず、当科のモットーは、「内科医としてきちんとした診断をする」ことが最も重要と考えておりますので、心電図、心エコー、核医学、MRI、CT、心臓カテーテル検査などを駆使して病態を総合的に把握することを心がけております。

循環器部門の功績

循環器内科は、胸部外科(心臓血管外科)との連携も密であり、定期的なカンファレンスも含め、互いに相談し合い患者さんの治療に貢献できるように協力体制が整っています。その伝統的なチームワークもあり、古くからの心筋梗塞を主体にした重症循環器疾患の治療に対する功績が対外的にも評価され、2005年に北海道社会貢献賞(救急医療功労者)を受賞、さらに2011年に救急医療功労者厚生労働大臣表彰を受けております。

循環器内科医師紹介

6名の常勤医と研修医で稼働しています。

○石井 良直 診療部長 / 循環器病センター長

虚血性心疾患の診断・治療や心不全治療が専門。日本心血管インターベンション治療学会指導医・専門医であり、若手の指導にあたる。最近では雑用も増え、若手の先生に任せることも増えてきています。

○幸村 近 診療部長

主に外来担当。広く博学であり、高血圧、抗凝固療法などの知識が豊富です。

○奥山 淳 内科医長

いつまでも若いと思っていたら、いつの間にか40台中盤になっていました。昔サッカーで鍛えた体力で、エネルギッシュでスタミナ十分。緊急対応時や研修医への情熱的な指導は頼りになります。

○菅野 貴康 内科医長

大学院上がりの学者肌？真面目という言葉が最も似合う好青年。コツコツと努力し臨床力もみるみる上昇中です。

○井澤 和真 内科医長

真面目で忙しくても手を抜かない信念の持ち主。一見ぶっきらぼうだが、本当はとても優しく思いやりがあり、患者さんからの信頼も厚く頼りになります。

○井川 貴行 内科医長

一番若手ですが、頭の良さはピカイチ？テキパキと要領よく多くの仕事をこなしています。PCIなどの手技もどんどん上達中です。

今後ともどうぞ宜しくお願い致します。(文責:石井)



「腎臓移植をしてまで長生きしたくない！」と上司の先生から、「腎臓移植をするなんて話は聞いてませんよ！」と事務の方から、1994年赴任してきた早々言われた言葉でした。

同年から透析室の開設に伴い泌尿器科4人態勢となり、翌年には当院で初めて腎臓移植手術をする事ができ、当時の村上院長そして泌尿器科大塚・本村両先生には大変ご心配をおかけしたと思います。現在まで移植も67例行ないましたが、献腎移植の増加とともに夜中に叩き起こされることが増えてきております。(どうしたわけかドナー情報は決まって夜中です。)

私は1958年網走生まれ、父が当地で産婦人科を開業しており、その背中を見て育ったのが医者を目指した理由の一つかもしれません。1983年北海道大学を卒業後は、まだ歴史の浅い移植医療に興味を持ち、腎移植を行っていた泌尿器科に入局しました。母親は「親・兄弟そろって、どうして下の方ばかり・・・」と、嘆いておりました。当時の腎移植は、ステイドの合併症で感染症か吐血ばかりで成績は良くなく、先輩Drから移植を志すなんて奇妙なやつと言われたものでした。

入局後は、市立札幌病院・旭川厚生病院・名寄市立病院で研修、名寄では当時北のシングルとして名をはせていた菊地院長の手ほどきでゴルフの研修もさせていただきました。

その後は大学に戻り北大第一病理学教室で臓器移植における分子病理学的研究(接着因子がメイン)、そして市立札幌病院腎移植科、北大病院助手を経て、サンフランシスコで脳死下臓器摘出・移植と夜の危険な街を経験した後、1994年に当院に着任、冒頭の状況となっております。最近では、年齢とともに運動不足からメタボ気味となり、長時間手術では膝に水が貯まり、犬の散歩からリハビリを始めているところです。

当院泌尿器科の守備範囲は、一般泌尿器疾患から専門的な要素を含むがん、小児、透析、移植と幅が広く、市内の諸先生方にお世話になることが多々ございます。最新治療機器を揃えるにも予算がつかず四苦八苦しておりますが、体外衝撃波結石破砕装置や軟性尿管鏡での結石治療、尿禁制型代用膀胱造設、鏡視下手術など、患者さんのQOLや機能温存を考慮したテーラーメイド医療を心がけています。



泌尿器科診療部長
金川 匡一



市立病院だよりを創刊

市民に広く市立病院のことを知っていただくため、「市立病院だより」を発行、旭川市のこうほう誌に折り込んで配布いたしました。

創刊号では、地域がん診療連携拠点病院として、かかりつけ医との連携についても紹介しております。

編集後記

半年に1回という遅い歩みですが、医療連携N EWSの第4号を発行することができました。

顔の見える連携の一助となれば幸いです。ご意見、ご感想をお寄せください。

市立旭川病院 地域医療連携室

〒070-8610

旭川市金星町1丁目1番65号

TEL(0166)24-3181(内線5370)

FAX(0166)26-0008

E-mail : h_jji@city.asahikawa.hokkaido.jp